## 2024年9月の総評に代えて

〇林　　桂〇

●杢いう子●（佐賀県　40歳）

黄昏のカッターナイフ引き出しへ

【評】カッターナイフをしまっただけのことなのだが、「黄昏の」は簡単には言えない。カッターナイフの危うい存在感のようなものが、演出されている。

●玻璃●（愛媛県　24歳）

花冷えて手術終わりの電話くる

【評】付き添っていた家人からとも考えられるが、手術を受けた本人からなのだろう。無事に手術が終わったことを告げるための電話だ。「花冷えて」に受け手の感慨が重なる。

●日下部　友奏●（群馬県　19歳）

秋の昼

浮腫んだ祖父はただ眠る

【評】病床にある祖父。昼間も眠り続ける。「ただ」に作者の無念は籠もる。せめてもの慰めは、寝苦しさの和らぐ秋となったことだろう。

●橋詰　桜京●（東京都　19歳）

モクレンが咲かなくなって三年目
カップ麺を啜る祖母の背

【評】一人暮らしの祖母か。老いの衰えをカップ麺を啜る姿に見ている。自分が食べるための調理に意欲が乏しくなっているのだろう。「モクレンが咲かなくなって三年目」の気づきが卓抜。庭木は手間暇を掛けないと花を結ばないものがある。丹精していたモクレンに手を掛けなくなった頃から、祖母の老いは始まっていたのかもしれない。

●髙松　瞳●（東京都　27歳）

おはようと蛇口に告げる
どの朝も
自分でない朝などなくて

【評】朝の洗顔のときの一人言だが、蛇口に語りかけるという意識。目覚めは毎朝新たな

自分に出会うことであり、そのための儀式なのだろう。もちろん、一人での生活が裏に張り付いている。

●神崎まい●（群馬県　18歳）

若夏のペットボトルに手を濡らす

【評】冷凍したりよく冷やしたペットボトルの表面は露結する。その露結したペットボトルを手にしている。書かれてしまえばさほど違和感がない「若夏の」だが、簡単には付かない言葉だ。青春俳句に仕上げる言葉だ。「に」の選択も巧み。「が」や「で」では、完成しないだろう。

●ムクロジ●（群馬県　17歳）

京言葉に慣れて唐辛子のへこみ

【評】「唐辛子のへこみ」へ屈折して飛躍する言葉の切れ味。かつ「京言葉に慣れて」の意味を韜晦する。

●平　廣平●（神奈川県　75歳）

文芸は虚構と言うに
真に受けて
ああだこうだと女うるさい

【評】作者の身近に作品に手厳しい批評家がいるのだ。妻か娘か。あるいは女友達か。彼女たちは、作者の日常と参照して、違っていると異議申し立てをする。これはフィクションだ。フィクションこそ文芸だと防戦に追われる作者。「女うるさい」と言いながら、その圧に勝ち目はなさそうだ。作者はたぶん愛されキャラなのだろう。

●奥井　健太●（滋賀県　22歳）

秋の暮チーズに曇るピザカッター

【評】「チーズに曇るピザカッター」の繊細な描写が秀抜。それも「秋の暮」という大きな季語との取り合わせが生み出すものだろう。

●齊藤　栞●（埼玉県　16歳）

梨を噛む雨のち晴れの街がすき

【評】雨上がりに輝く街の美しさ。「梨を噛む」

の取り合わせが巧み。梨という瑞々しい果実が、雨後の街に響きあう。

●碧碧●（東京都　54歳）

お月様の電気が点いたね

【評】これは幼い子どもの一言をそのまま抜いたものだろうか。私事だが、子が幼いときに、初めて飛行機に乗ったときの感想を祖母に聞かれて、「雲が海に落っこちていたよ」と答えたのを思い出す。

●波野　梅雨●（東京都　14歳）

ジャズの中に隠れた林檎

【評】意味が十分に取れている訳ではないが、短律表現の魅力の切れ味がある。14歳とわかり、驚いている。

●早瀬はづき●（大阪府　20歳）

火を見ればまばたきのたび
眼のなかに
濡れながら火が像をなすこと

【評】瞬きは眼を濡らすためのものだから、火を見つめ続けていることを語っているに過ぎない。しかし、最終行の「濡れながら火が像をなすこと」の出現が、そのまま火の美しさの表現となっている。

●あゆな●（群馬県　39歳）

先輩はヤングケアラー
八つ橋を
ネットで買って我慢するって

【評】ヤングケアラーの先輩は、修学旅行に行くことができない。京都土産の八つ橋をネットで購入してすますのだという。フィクション性が高い作品だが、ヤングケアラー問題を提起する。